

『万葉集』から見る日本の古典

獨協大学特任教授 城崎 陽子

聖徳太子 その4

先回は『万葉集』の「籠田山の死人を見悲傷して作らず歌」と異伝関係にある『日本書紀』や『三寶絵』の聖徳太子伝承を取り上げ、片岡山に倒れ伏していた「かたみの人(病人)」と太子が歌による応答をした様や富士登拝伝承などを取り上げて、太子伝承が形成される次第をたどつてみた。今回は、太子伝承が更なる伝承を生み出していった様を『元亨釈書』などをもとにして記す。

ここまで「片岡山の飢人伝承」と名付けられるモチーフをもとに、『日本書紀』から『三寶絵』『拾遺和歌集』など様々な古典作品を経ながら形成されていく様を確認する。

ここまで「片岡山の飢人伝承」と名付けられるモチーフをもとに、『日本書紀』から『三寶絵』『拾遺和歌集』など様々な古典作品を経ながら形成されていく様を確認する。

数日使_レ使_レ開墓_一。不見_レ屍。衣在_二棺上_一。

『元亨釈書』は鎌倉時代後期に活躍した臨済宗聖一派の禅僧虎関師鍊が記した日本で最初の総合仏教史書である。虎関師鍊が「山国師(山一寧)」に本朝の高僧の事跡を尋ねられたところ、満足に答えられなかった。この時一山国師が、虎関師鍊は異域(インドや中国)の事になると能く応えることができるが、本邦のことになると応答に苦しむことを難詰され、発奮して元亨二年(一二三二)に完成させたのが当該書である。

問題となる記事は、聖徳太子が菩提達磨に出会ったとされる一節である。太子が片岡で目にした「飢人(飢人)は頭が大きく、面長で、目は小さく耳が長く、眼光するどい人物であった。太子は彼と久しく語り、食物や衣服などを与えて宮に帰った。そのまま殂(死)んだ」



聖徳太子廟(大阪府南河内郡太子町・叡福寺)

王寺の僧敬明(教明とも)によって記されたと思われる『七代記』にはすでに見えていたから、その伝承が十四世紀に至ってひろく定着したとみてよからう。

菩提達磨は禅宗の開祖(生没年未詳)であり、六世紀のはじめ、西域より中国北部地域に渡来し、洛陽を中心に活躍したと

される。諡は円覚大師。二十世紀に入つて、敦煌文書が発見、解析されるに従い、「壁観」(壁が何物も寄せ付けないように、本来清浄な本性に目覚め、成仏せよとする思想)と呼ばれる独自の禅法や弟子たちとの問答が確認された。「不立文字、教外別伝」(文字や言語や経典によつて伝えられるものではなく、師弟の心から直接に伝えられること)、「直指人心、見性成仏」(自分の心をつかむことによつて、自己は本来仏であることに気づくこと)といった教義を平易な言葉で説いた。頭から全身に紅衣をかぶり坐禅する図像が有名である。『日本大百科全書』参照。

この伝承が民間に伝わり、片岡山の「飢人」は菩提達磨の生まれ変わり、聖徳太子が自ら刻んだ達磨像を祀つたのが達磨寺(奈良県北葛城郡王寺町)であるとの開基伝承も伝えられている。

さて、ここまで何回かにわけて「片岡山の飢人伝承」を中心に中世期ごろまでの聖徳太子の伝承を見てきたが、聖徳太子伝承の広がり、この一点に限られているものではない。『日本書紀』の聖徳太子伝承に基づくだけでも、所縁とされる寺院は多い。そのいくつかを紹介しておく。

用明天皇二年(五八七)四月、天皇が崩御するとそれまで熾っていた、崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋との争いが表面化した。双方が兵を起し、争乱に及んだ際に、聖徳太子が白膠木で四天王像を造つて戦勝を祈願した。そして、戦い勝つたものに聖徳太子は「四天王寺(大阪府大阪市天王寺区四天王寺)」を建立したとされる。また、推古天皇十三年(六〇五)に「斑鳩宮に居します」とある斑鳩宮が後の「法隆寺(奈良県斑鳩郡斑鳩町)」の基となった。また、推

古天皇十一年(六〇三)、太子が「尊き仏像を有てり。誰か是の像を得て恭拜まむ」と言うのを、秦河勝が承り、建立したのが「蜂岡寺(現在の広隆寺(京都府右京区太秦蜂岡町))」である。さらに、推古天皇二十九年(六二二)二月五日に聖徳太子は斑鳩宮で薨去し、磯長陵に葬られたが、この陵を有するのが「叡福寺(大阪府南河内郡太子町)」である。叡福寺は、聖徳太子の命によつて蘇我馬子が建立したとされる「野中寺(大阪不羽曳野市野々上)」、四天王寺建立とも縁の深い「大聖勝軍寺(大阪府八尾市太子堂)」とともに、それぞれ「上之太子」「中之太子」「下之太子」と呼ばれ、それぞれが太子所縁の寺と位置づけられている。なお、聖徳太子所縁の寺院は四十八寺院とも言われ、紙幅の都合によりすべてを紹介できないことをお詫びする。

高尾山

四季の草花

113

ホドイモ 塊芋
マメ科・アヒオス属



ホドイモの「ホド」とは塊(かたまり)と言う意味で、地下に塊状の芋が出来る事からこの名前があります。

花の名前も面白いですが、花のかたちもユニークです。竜骨弁が曲がり、外側の黄緑色の旗弁とピンクの翼弁の組み合わせが何とも言えない形ですね。

ヤブツルアズキという木色の花も竜骨弁があり面白い形の花ですが、色が付いている「ホドイモ」には負けません。

葉は複葉で三〜五枚で蔓性の植物です。高尾山では中々見られない花の一種ですが、探すとあるものですね。

(撮影・文 中村 毅人)